「誰も誇れない」

エペソ人への手紙２：８－１０

July.3.2022

エペソ人への手紙２：８－１０（パワポ）

Preface

私たちの付け入る隙がございません。

私たちが誇ることの出来る隙が全くありません。

私たちが私たちでいられることは、それすべて神の恵みであって、信じるという行為さえも私の能力で信じているのではなく、信じることが出来るように心を、体を、霊を変えて下さった恵みゆえにキリストを信じ、神を知る者となれたと言います。

しかも、キリスト者となってキリストが望まれる良い行いをしたいと思うことさえも、また良い行いを実践することが十に一つ出来た時でさえも、それすべて、私が私の力で行った私の良い行いではなく、神があらかじめ備えて下さったものであるからこそ出来たものであって、

またその時湧いてくる感情は、「ああ、私はやったんだ」という自分を誇る気持ちではなく、「ああ、やらせていただいたんだ」という感謝の気持ちしか出て来ない程に、私たちのやることなすことそれすべて、良い行いは神様がご計画してくださった恵みだと言います。

これまでエペソ書１章から２章にかけて、信仰、福音、救いに関する壮大なスケールの陳述を見て参りましたが、パウロは「それすべて神の恵みなりき」と重ね重ね言ってきました。

今日の聖書箇所のすぐ前の箇所でも、「あなたがたが救われたのは恵みによるのです。この限りなく豊かな恵みを来たるべき世々に示す」と言っています。

度重なる恵みについての言及ゆえに、不敬虔にも「神の恵みについては十分知ったからもういいよ」と思えてしまうほどですが、ここに来てまた、さらに念を押すかのように神の恵みについて語ります。

ではなぜ、ここまで恵みについて語るのか？

その最も大きな理由は、私たち人は、神の恵みについていつも間違い、思い違いをしてしまうからです。

恵みと言うからには、そこに私の力の入る余地なんか全くないにもかかわらず、何とかしてそこに私の足跡を、私の誇りを、または私の意見や思いをねじ込んででも、他者と比較した時優越したところがあることを自らに示したい、また他の人たちにも示したいと思う習性があるからですね。

例えば１０節に、「私たちは神の作品であって」という有名な言葉があります

が、「ああ、こんな私も実のところ神の作品なんだ！」と、私たちはこの言葉にどれだけ慰められ、励まされ、肯定されてきたことかわかりません。
　神様もこの言葉をもって、私たちを勇気付けたいと思って下さっていることも事実だと思います。
　ですが、良―くここの箇所の文脈を考えながら読み解いていきますと、「**私たちが**、神の作品である」という事を言おうとする以前に、「**神が**、神ご自身のために私たちを作品となさった」ということが先だということが分かります。

　つまり、「私たち」が主語ではなく、「神が」主語の内容です。
　作品とされた私たちが凄いものとされたこと、それはそれで事実ですが、私たちの凄さよりも、恵みを施して下さった神の凄さを先に言おうと、すべては神の恵みであることを認知し、分かって欲しいと願っていることが見えてきます。

　即ち、私たちの誇りや自慢やプライド等の入れる余地が一切ない神の恵みを認める生き方が出来ていますかと、エペソ書の著者であるパウロが私たち読み手に問うているように感じます。

Part One

　土浦めぐみ教会という名前は、教会の名前として本当に素晴らしい名前だと思います。
　それすべて、神の恵みであるという事を名前からして表しています。
　実際、すべてが神の恵みでした。
　現在も神の恵みであり、未来も神の恵みであるでしょう。
　でもともすると、口では神の恵みと言っておきながら、「こんなことをしてきましたし、あんなこともしてきました。このことのために　こんな犠牲もありましたし、あんな献身もありました。そして、他のところにはないこんな立派なこともしていますし、さらにこのことのために神様が必ずや新たな恵みをお与えくださると信じています」と一見すると分かりにくい、信仰の熱心という上張りに隠された巧妙な誇り・プライド・自慢が見え隠れしてしまうのが私たちであります。

　聖書の学びをするとか、御言葉を語るとかという至って信仰的な行為においてでさえも、「あの人が知らないことを私は知っている」というような気持ちになってしまいますが、そういう気持ちになっていることにも気付かないことが多々あります。
　神の恵みと言っておきながら、何とかして、その恵みの中に自分をねじ込んで、「聖く正しく誇ってみたい」と思ってしまうのが、私たちであります。
　だから、文脈上合わないように思えてしまうほどに、突然横っ腹を突いて来るかのようにしてまでも、神の恵みについて繰り返し語り続けるわけです。

Part Two

私たちは、良い行いをするために、キリスト・イエスの内に造られた作品であって、作品自ら他の作品と比較して自慢しようとする者ではありません。
普通作品は、皆一様に作品であって、その違いを自ら自慢しようとはしません。
その代わりに、造られた目的・意図を達成することが作品の存在価値となります。　　ここでは、良い行いをすることです。

では、私たちは良い行いをしたから、救われたのでしょうか？
または、救われたから、良い行いをするのでしょうか？
救われたから良い行いをするのであって、そこに私たちの自慢や誇りの入る余地はありません。

では、なぜ、自慢したい、誇りたいと思うのか？
それは、他者との違いを見せつけたいからですね。

エペソ書２章の冒頭部分で学んだように、私たち人間に違いはありません。
聖書の発する最も大事なメッセージのうちの一つは、私たち皆一様に同じだということです。

即ち、皆が皆、自分の背きと罪の中に死んでいた者であり、不従順の子らとしてサタンや悪霊どもに知ってか知らずか従っていた者であって、自分の欲望と心の望むままに歩んでいた生まれながら神の御怒りを受け、地獄に落ちて至って当然の自然な存在でした。
自慢できる余地なんか１ｍｍもないのが、私たちです。

それなのに、神様は、そんな私たちを可哀そうに思って下さり、地獄に落ちる身分から天上に座る身分へと変えて下さいましたが、なぜ変えて下さったのか？
身分が変わったことを他者と比較して、優れていることを自慢し、誇るためでしょうか？
違いますね。　キリスト・イエスにあって良い行いに歩むために造りかえてくださいました。
良い行いが何なのか知らない私たちに良い行いを教えてくださり、以前のように自分を誇ることを目的とする良い行いではなく、主イエスというお方が目的である良い行いに行きたいと思える者に造りかえて下さいました。

そしてここで、ついに初めて、私たちは良い行いをすることが出来るようになりました。
それまで私たちが良い行いだと思い教えられやってきた事は、良い行いではありません。
どういうことかと言いますと、キリスト・イエスにある救いに与らない限り、良い行いをすることは不可能だということです。

にもかかわらず、私たちよくこんなことを言ったりします。
「あの人は、イエス様は信じていないけれども、イエス様信じているクリスチャンよりもクリスチャンらしいし、きっとああいう人が天国行くんだよ。」
これは、聖書によりますと、妄言であり、でまかせになってしまいます。
つまり、私たちが持っている善とか良い行いに対する概念が、間違っているということです。
私たちがキリストを知る前に比較していた善や良い行いの基準は、倫理であり、道徳です。

でも、聖書の教える善または良い行いは、倫理道徳ではなく、神様側にいるのか、そうではないのかの戦いです。
善は、そっくりそのままそれすべて神様側にあるもので、そうではないものは、そっくりそのままそれすべて悪となります。
どんなに素晴らしい善行であれ、倫理道徳的に素晴らしい行いであれ、正義で正しくて呆れるほどに他者のために生きたとしても、キリスト・イエスのうちにないならば、それすべて悪です。
「すべて、のろいが臨むことである」と、聖書は言います。

「いや、そんな馬鹿げたことがあるか？！　何そんな勝手なことを言うんだ！」と世間一般は思いますが、「はい、あるんです。　神様の御心どおりがどんなことであれ、善なんです」と言うのが、聖書です。

ですが、私たちの思いは中々そうはなりません。
世間一般的に言われる良いことや素晴らしいことが良いことだと思い込み、その良いことをもって、私自身の自慢や誇りのネタにしますが、「それは違う」と言うのが、聖書です。
使徒パウロは、ピリピ書で、「私が知り持っているどんな誇り、名誉、経歴、財産、知識、善行、道徳、宗教心、正義、正しさ、特技趣味が、もしキリスト・イエスと分離しているならば、それすべて（直訳しますと）クソであり、何の役にも立たないばかりか、妨害であり、悪臭を放つものでしかありません」と言います。
このパウロの言葉に、実感が湧きますでしょうか？

Part Three

もし実感が湧くならば、心痛む話になりますし、また聖書の御言葉をまともに受けとめているということにもなるでしょう。
ここ最近私がメッセージをするようになってから、やけに厳しいメッセージばかりで責められている気がして、ちょっと聞きづらいというご意見を頂くのですが、未熟で至らないためにそういう説教になってしまっていること、本当に申し訳ございません。
でも正直、聖書の話を真正面から受け止めようとしますと、心が痛むのが事実

ですし、心が痛むとすれば真っ向から聞いておられるという事ですが、もし、「ああ、私があの人について、あいつについて言いたいことを牧師が言ってくれている」と、心がすっきりするようならば、それはちょっと受け止め方に問題があることになってしまいます。
　あくまで聖書は、何よりもまず私たち自身に向けて語ってくれていることをまず覚える必要があります。　そして、聖書の言葉は、私たちをお造りになった方がお語りになった言葉なので、これほど正確な言葉もないですし、私たちを素っ裸にしてしまう心痛む言葉もありません。

　イエス様が昔、パリサイ人たちとあんなにも争った理由がここにあります。
　なぜパリサイ人たちは、十字架に架かられる前のイエス様のお働きにいちいち反対し、いちゃもんを付けたのか？
　なぜ、あんなにも唸り声を上げ、威嚇をしたのか？

　ただ一つの理由のためです。
　福音は、すべての人を同じにしてしまうからです。
　福音を前にして人は、誰が誰よりも優れているなんてことは決して言えません。
　すべての人が、生まれながらにして御怒りを受けるべき子らであって、すべての人が、イエス・キリストの恵みによってのみ救いを得ます。

　しかし、パリサイ人たちは、それが我慢なりませんでした。
　なぜ、我慢ならないのか？
　皆同じだと、悔しいからです。
　週に二度断食し、全収入の十分の一を献げ、神殿に出て来て祈りまで献げるのに、他の人たちを同じだ、同点だ、お相子だというのが、どうにもこうにも納得が行かず、悔しいんです。
　私たちも、彼らの気持ちがよく分かりますよね。

　だから、イエス様を殺してでも、区別したいんです。自分と他人との差別化を図りたいんです。
　「私は、あの人よりも良いんです、優れてるんです、出来るんです」と、遮二無二に表したいんです。

　これに対するイエス様の応答を山上の垂訓式に言いますと、「彼らはすでに自分の報いを受けているのです」です。
　「父とは関係なく、人の前で、賞を報いを受けているだけだ」と仰います。

　パリサイ人や律法学者たちは、人間の前で賞を貰うために、イエス・キリストを殺しました。
　でもこれは、パリサイ人や律法学者たちだけの問題でしょうか？

違いますね。
私たち全員の問題です。
これがどんなに恐ろしいことで、不幸や戦争を生み出してきたことか分かりません。
人類史上初の殺人も、「あいつと一緒なのは、腹立たしい」ということから生じました。

私たちは、しきりに、「あの人とは違います。　少なくともこの問題に関しては、あの人よりも私の方が正しいですし、優れています。　だからどうか区別してください。私の意見を採用してください」と言いますし、思います。
ですが、それは違うと、主なる神様は言います。

コリント人への手紙第一６：６－８（パワポ）

ここの箇所だけでなく他の箇所も含めて聖書が言うには、「あなたがたに違いはありません。だから、どこまでも耐え、覆ってあげなさい。その人も、主が血を流されたあなたの兄弟だから受け入れなさい。　その兄弟との争いをもって世の裁判官のところまで行ってはならないし、むしろ、あなたが不正な行いを甘んじて受けないのですか？　あなたが損をし、被害を被り、騙し取られる方が良いのではないのですか？　あなたの仲間をあなたが受け止め、あとは主に委ねるということが最善ではないですか？　あの兄弟よりも、あなたの方が優れていることを証明したいのですか？　では、本当に優れているのですか？　誰が誰よりも、どの辺がどう優れているのですか？　あなたがあの人よりも三日早く信じて、あの人があなたよりも三日遅く信じて生じる違いは何ですか？」です。

私たちの問題の核心を突く、厳しい言葉です。
でも、これこそ、今日の聖書箇所エペソ書２章の御言葉が言いたいことです。

Part Four

私たち皆、良い行いのために、神様が今一度新たに造り直さなければならなかった存在です。
実のところ、直すどころの話ではなく、壊して、殺して、死体となった後に、新しく造りかえるしか方法が無い者たちです。
そこに違いはありません。

そこに違いがないことが皆さんにとっては感謝ですか？
それとも、悔しいですか？
もし悔しいとお思いならば、信仰的に問題があるということです。
でも、実際、私を含めて悔しいと思わない人の方が、遥かに少なく、いたとしてもほんの僅かでしょう。
それが、私たちです。

何とかして、相手よりも上回っている点を見つけて、区別されたい、違いを見せつけたい、何としてでも上回っている点を見つけ出すために、物事を細分化し、細かくし、粉々にして、何とか上回っているものを見つけ出して、自分を誇りたい、自分の正しさを証明したい、そのためにどれだけ多くの切れ端のような事細かいことを無駄に作り出していることか、それが私たちの本性です。

私たちの多くは、まだまだ、神の恵みが何なのか知らないのかもしれません。
私たちはまだ、自慢できるものを、誇れるものを探している者たちなのかもしれません。
その結果、私たち自らの手で、信じていると言いながらも福音を押しのけて、再び律法や規則や習慣・風習に逆戻りしているという事を、信仰者として驚きをもって、受け止めなければならないですね。

もちろん、私達、人前で違いを見せつけて拍手喝采を受けることも出来ます。
正しいことをあたかも正しく立派に表すことで、人よりも優れていることを証明することも出来るでしょう。
しかし、その後で、神の前で大目玉を食らうことを覚えておく必要もあります。

私たちは、大概、間違っていて失敗するよりも、正しいことを正しく表現して失敗します。
正しくもないのに正し過ぎるから、正しさを装うから失敗するんです。

私たちが覚えることは、恵みだけですね。
神の恵みを覚えた時、私たちに出来ることはただ一つです。
黙って聞くだけです。
人の言葉を聞くこと以上に、神の言葉に黙って聞くだけです。
そうしますと、恵みとしか表現出来ない恵みというものに、自分という人を無理矢理ねじ込もうとしている自らの恥ずかしい姿、貪欲、高慢、正義ぶった悪なる本心が見えてきます。

私たちに出来ることは、造りかえていただいた恵みに感謝し、喜んでその恵みに服すだけです。
ただその恵みに生かされていることを実感させていただきながら感謝を覚え、また感謝ゆえに比較と自慢に生きるのではなく、皆一様に恵みを受けた作品であることを感謝するばかりです。

Part Five

無論、こうは言っても、そんな簡単なことではありませんし、これはとても難しい困難な霊的戦いでもあります。

一人の人が「これが出来ている、あれが出来ていない」という律法を持ち込んで、自らの優越性を示そうとすると、皆が試みに遭い、躓きます。
どのように躓くかと言いますと、触発された各々が各々、自信のあるものを持ち出して来て、比較し、差別化し、自らの正しさを示そうとします。
カオスですね。

これこそ、信仰生活を生きていく上で、最も難しい試みです。
恥をかかせられたから、かかせ返す。
すると結局、正しさが示されるのはなく、みんな揃って潰れます。
まんまとサタンの手中で踊らされて、終わりです。

ガラテヤ人への手紙５：１５－２３（パワポ）

私たち誰もが神の前にあって、その成熟度や成長において未達です。
霊的新生児から霊的還暦・米寿に至るまで様々ですが、皆が皆、イエス様の前にあっては未達です。
ならば、先に、少しでも神の恵みに気付けた人が、笑って、負けてあげればいいだけのことです。
イエス様だって、サタンの試みに外見上負けてあげ、結局、本質的な勝利を当然のように勝ち取って行かれました。

出来ている出来ていないという律法を持ち出したところで、そこに勝利はありません。
出来ている出来ていないという律法を出せば出すほどに、底なし沼にハマって、時間と共に沈み、やがて潰れて死んで行くだけです。

だからこそ私たちが覚えることは、恵みです。
私という人の入る余地のない全き神の恵みです。
神の恵みを覚えれば、そこに空間が生まれ、余白が生まれ、ゆとりが生まれます。
私という人を無理矢理神の恵みにねじ込もうとしなければ、恵みの余地が生まれます。

ローマ人への手紙３：２０－２８（パワポ）

Conclusion

福音は私たちを区別も、差別もしません。
私たち人間比較するまでもなく、みんな同じです。
なのにここに、出来ている出来ていないということを持ち出して違いを見せつけようとしますと、待っているのは滅びだけです。

アイアン・サンドラ牧師という方が牧会する教会で、大きな問題が起こりました。一人の信徒が深刻な過ちを犯してしまうんです。
そして、この信徒の方に対してどのように対処するのかという教会全体の会議が開かれました。
赦すのか、それとも規則規律通り罰するのか、喧々諤々と意見を交わしていたところ、ある一人の若い青年が手を挙げてこう言いました。
「牧師先生、私たち、規則通り処理いたしませんか？」
すると、サンドラ牧師は笑みを浮かべながらこう言いました。
「規則通り、法に従って処理したならば、君は、とっくのとうに地獄に落ちていることでしょう。」

これは、とても大事なことですね。
ローマ書の言う通り、神様が規則通り、律法通り、法に従って、ご自分の掟通りに私たちを取り扱っておられないから、今この場にいることが出来ています。

どんなことにおいても、本当は、「法に従って規則通りにしましょう」なんていう風に、何の疑いも躊躇もなしに堂々と主張することなんか出来ない存在であることを、私達、神の恵みを知る者として知っておかなければなりません。

私たちの生涯において、私たち誰に対しても指差すことも出来なければ、口をとんがらせて「私は間違っていない」と言い張ることなんか出来ない人であることを認めなければならないでしょう。

私たちは、皆同じく罪人であり、皆同じく恵みによってのみ生かされることが出来る存在です。
それでも、その恵みに自分を何とかしてねじ込みたいと思うならば、「汚れた肉の欲望よ、主イエスの名によって退け」と言い放ってください。
そして、練習をしましょう。
主の恵みを覚える練習をしましょう。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ書２：９